

歴史の中の留学生 ⑤

宮武正道の送別のことば

エラケツが昭和8年(1933年)に別科を修了し、パラオへ帰島する際に友人たちが書いた『エラケツ君送別記念文集』の中で、宮武正道はパラオ人の信仰について「神父の前で懺悔を強制するような宗教は広めにくい、その点、直接神様に懺悔する天理教は島民によく理解される。」と、キリスト教と天理教の比較をしている。また「人を病気にする神の呪力を信ずる島民だから、おていれの理がわからずとも神が人を病気にするという思想や、物おしめたり我儘勝手なことをしたりしたため神様から罰をこうむるという思想を有している。パラオ人に明快な天理教義のよく判るのは当然の事で、将来天理教はパラオ人間にかなりひろまるだろう。」とも述べている(『エラケツ君送別記念文集』49頁)。確かに日本統治下にあったパラオでは、宮武が述べたように布教が伸びていく素地はあったのだと思われる。

あつけない最期



パラオ教会前で：「皇紀二千六百零五年」とサインあり
(奈良大学図書館蔵)

エラケツが初めて帰島した昭和8年3月、日本は国際連盟を脱退した。その6年後に第2次世界大戦が勃発することになるのだが、戦争の影が刻々と迫りつつある時期であった。この年の天理教の動きとしては、山澤為次が南洋方面地方教義講習会の講師として巡教に出て、清水芳雄の5年祭にあわせ殉教碑を現地に立てる為に再度パラオへ渡航したことが挙げられる。また同年11月には、渡航前にエラケツから言葉や文化を学んでパラオへ布教に来た近藤藤三郎がペリリュウ教会を設立している(佐藤庄司『東南アジア伝道資料調査稿(6)』2015年、26頁)。エラケツは昭和11年に3度目の帰島をしているが、その時にサイパン、テニアン、ヤップ経由で北村信昭も同行した。北村はエラケツのボキャブラリーの豊富さはミクロネシア全5万の島民中随一と述べているが、そのことが現地の一部邦人から反感を買い、とりわけ下級官吏による風当たりが特に強かったようだ。つまり、下手な日本人より垢抜けしていたことが「島民らしからぬ島民」と見られ、内地では可愛がられた彼が「植民地の一民衆」として冷遇されていたのである。北村はそうした諸々の事象を何度も見て不憫に感じていた(『奈良いま昔』奈良大学博物館、69頁)。エラケツは島に戻ってからも、熱心に天理教の布教活動もしていたそうだ。しかし昭和14年に第2次世界大戦が勃発し、その後、パラオも戦禍に巻き込まれる。そして、パラオ教会があるコロールからパラオ本島へ避難しようと帆走の小艇で荷物運びをしている時、碇がリーフに引っかかり、それを外すために海中へ飛び込み、そのまま潜水事故でエラケツは亡くなってしまった。わずか30代前半の若さである。あまりにもあつけない最期であった。

はっきりしないエラケツの没年

パラオで警察隊長になっていたビスマルクの話によれば、エラケツが亡くなったのは、昭和19年3月ということになっている(『奈良いま昔』75頁)。『宮武正道 追想』の巻末年表にも、「昭和19年3月、エラケツ、パラオ島で潜水事故のため死去」となっている。また『天理教海外伝道部報』第141号では、「エラケツさんは内地に留学し、別科も卒業したが昭和16年に不幸にも出直してしまった。」とある。清水芳雄の実弟で兵神大教会長清水国雄が昭和48年にパラオに渡り、エラケツの家族から聞いた話でもあることや、北村がエラケツと連絡が取れなくなったのも昭和16年である。しかし、パラオ教会前で撮った写真には皇紀2601年(1941年[昭和16年]に当たる)10月とサインがあり、その時には生きていたことになる。河路由佳氏が指摘しているように、結論として現状ではエラケツの死を特定することはできない(『ことばと文字』13号、2020年、203頁)。31歳から34歳の間に亡くなったことになるが、いずれにせよ30代前半のあまりに短い生涯である。

終わりにあたって

調べたことを年表にまとめていて感じたのが、エラケツと親しかった宮武正道(32歳没)も、最初に天理教に導いた佐藤嘉一(36歳没)も、現地で弟のようにかわいがっていた清水芳雄(27歳没)も若くして亡くなっている。天理で世話をした山澤為次も51歳で亡くなっている。神の思いがどこにあるのかと考えさせられる。南洋への布教は途絶えてしまっているようだが、やはり海外布教というものは息の長いものなのかとも思えてくる。天理教伝道史に詳しい高野友治が「第70回東南アジア布教委員会」(1977年)で海外布教伝道について述べているように、失敗を何度も何度も繰り返して、ようやく一つの成果があがるものなのかと痛感させられる。北村信昭は平成11年に92歳で亡くなっているが、写真や手紙を始め、多くの遺品を残している。また実家が写真館であったことから、多くの写真が残っていることも幸いなことである。まるで後世にこの話を伝えるための生き証人としての役を担ったのかとも思えてくる。筆者は時間がある時に、集まった資料の中に出てくるエラケツにゆかりのある天理市内や奈良市内の場所を訪ねている。昭和初期とはすっかり変わっているところも多いのであるが、奈良奥山や鶯の滝のように自然のままのところもある。山に囲まれた奈良盆地で約80年前に南洋から来た青年と奈良の人々との素敵な出会いがあったのだと感ぜずにはいられない。彼らは時代に翻弄されていたのだろうか。連載の中でこの話を取り上げてから、キーワードがいくつも浮かんできた。友情、絆、戦争、海外布教、信仰、生涯……。登場人物のそれらが詰まったドラマを見ているような気分で執筆してきた。まだまだ明らかになってはいないこともあるだろうが、これからも更にいろいろ調べてみたいと思っている。

謝辞

5回にわたるエラケツの話ですが、まとめるにあたり協力してくださった皆様に厚く御礼を申し上げ、感謝する次第です。なお、誌面では紹介できなかった「奈良大学図書館・北村信昭文庫蔵」の写真も他に幾つかありましたので、YouTubeで7分ほどの動画に編集しました(https://youtu.be/71_45yHqHBM)。ご覧いただければ幸いです。